

十一月例会 平成九年十一月二十二日(土)

順天堂大学医学部九号館八番教室

一、順天堂大学医史学研究室所蔵 吉益東洞自筆

『古書医言』について

館野 正美

一、土佐藩足輕 岡本兵衛の戦病死をめぐって 中西 淳朗

十二月例会 平成九年十二月二十日(土)

順天堂大学医学部九号館八番教室

日本薬史学会と合同例会

一、ビタミンの発見に対する漢方医学の貢献 山下 政三

一、中国システム医療概観(中国衛生年鑑等に見る三級医療網)

川瀬 清

一、江戸時代の腑分の絵図の特質性について 和田和代史

一月例会 平成十年一月十七日(土)

順天堂大学医学部九号館八番教室

一、齋藤玉男―断種法史上の人びと(その二) 岡田 靖雄

一、田代三喜、曲直瀬道三、再考

―導道と三喜、当流について― ○遠藤次郎、中村輝子

順天堂大学医史学研究室所蔵、

吉益東洞自筆『古書医言』について

館野 正美

『古書医言』は、我が国江戸時代における古医方最大の臨床家、吉益東洞が、彼のその独自の病理学的思惟の観点から、中国の古典文献に見える医学思想の諸形態について分析し、これを記述するという、ひとり『古医方』の医学体系についての医史的な見地からの理論的な研究においてのみならず、その医学思想の淵源形態の追究、更には、ひろく中国古代の医学思想全体についての体系的な研究においてもまた、きわめて重要な位置を占めるところの一大著作であったと考えられる。すなわち、彼のこの著作は、総計三十七種類の中国の古典文献の中に散見する中国古代の医学思想について、彼のその独自の観点から、これを分析して記述するという、『薬徴』や『類聚方』とはまた違った意味で、きわめて興味深い文献であったと考えられるのである。

ところでこの『古書医言』には、東洞自筆とされる写本(原稿)が現存する。現在の刊本(文化一一(二八)一四)年および元治元(一八六四)年刊)の約四分の一の分量しかなく、また、そ

の約八割が(当然のことながら)現在の刊本とほぼ同様の内容を記述するものではあるが、南涯・北洲が校定する以前のこの原稿には、多少なりとも現在の刊本を補うべきものがあるように見受けられ、きわめて重要な一本であると考えられるのである。

さてこの東洞自筆の原稿は、現在、順天堂大学医史学研究室の山崎文庫に所蔵されている。(以下、山崎本と称する)この山崎本は、袋綴じの半紙本(全長約二五・五cm、幅約一七・二cm。但し、原本は更にひと回り小さい。それを半紙に貼り付けている)で、全三十八葉(但し、三葉が切り取られている)、每半葉十行、行十五字。刊記はないが、見返しに「古書医言 原稿 吉益東洞先生 自筆」という識語と「富士川家蔵本」という蔵書印があり、ウラ表紙のウラには、「(山崎先生が)富士川先生の形見として頂戴した。昭和十七年十月三日」旨の奥書が記されている。なお、蔵書印は、更に順天堂大学のものが認められる。また、こまかな朱の傍注・傍訓がある。おそらく旧蔵者のものであるろう。全書を通じて一人の手になるものであり、筆跡も東洞のそれにきわめて近しく(この点については小曾戸洋博士の御教示を頂いた)また、内容的に見ても、現伝『古書医言』の原稿であることは間違いないと思われる。

現伝の刊本に比べて、やはり魯魚の誤りや(東洞にとって外国語としての)古典中国語の文法的(主に語順の)誤り等が多い。言うまでもなく、現伝本に見えるこれらの校正は東洞自身の推敲の跡でもあろうが、同時にまた刊行に際して、南涯・北

洲らが手を加えた部分もあろう。特に注目されるのは、例えば現伝本(巻二)の東洞のコメントに「爲万物唯一毒」とあるのが山崎本では正に「爲万病唯一毒」に作っている点である。これなどはこの山崎本があつて初めて現伝本の誤りを校正できる例として注目されるのである。

同様にして、山崎本ではいささかまとまりが悪かつた文章が、刊本では整理され、スッキリとまとまっている例もよくある。①⑧などである。

更に、内容的にいささか手が加えられていると目されるものがある。③⑨⑩などである。

その上、東洞のコメント自体がなくなっているものもある。

③⑨については、いわゆる「気血水説」を主張する南涯が、あるいは自分の考えで削つたものであるか、とさえ考えられるほどに明確な東洞の意志が見て取れる記述である(実の父の文章であっても、間違いがあればこれを正すのが子たるの道だ、と主張した南涯の態度からすれば、こういうこともありうると思われる)が、⑩については、その可能性すらも分らない。ただ、内容から見て、これが東洞の言であることはまちがいないからう。そこで今言えることは、この山崎本の記述を見ることによって、『古書医言』の記述の内容を、多少なりとも補うことができ、それによつて東洞の医学思想がより明確な形で再現されうることである。それらは決して従来の定説を覆すというほどのものではないが、細かな点で、従来の東

洞の特に医学思想の研究に寄与しうるものであり、この点で、この山崎本は、きわめて資料的価値の高いものであると言えるであろう。そこで今後、更に『医事古言』をも必要に応じて参看しながら、この山崎本について一層研究してみたいと考えるものである。

(平成九年十一月例会)

土佐藩足軽・岡本兵衛の戦病死をめぐって

中西淳朗

一、戊辰戦争第二期(江戸城開城後より会津若松城開城まで)において、関東の野戦で傷つき横浜軍陣病院で死亡した土佐藩の兵士について調査したところ、四名をリストアップ出来た。その中の一人、足軽岡本兵衛の墓は、横浜市西区久保山の共葬墓地第三区にある土佐藩官修墓地には存在しない。

二、『幕末維新全殉難者名鑑・第四卷』(新人物往来社)には次の如くかかれている。

「岡本兵衛美雅、足軽、土佐郡潮江村の人。迅衝六番隊、明治元年四月二十二日下野安塚で傷、九月二十二日横浜病院で死。二十二才、横浜市西区大聖院に墓、靖国。」

また太政官日誌第十三号に記されている板垣退助の届書によれば、岡本の損傷は「重創、左耳を貫き枕骨を推く」とある。これらにより岡本の病状を大凡理解できるようになった。

三、岡本は、受傷後壬生城内の養生局(病院)に收容され、土佐藩医弘田玄又親厚らの手当てを受けた。四月二十日に江戸を出発した弘田医師らは、二十二日に壬生城に到着した。

即ち、壬生北方の安塚での銃撃戦、土佐、因州を主力とする東征軍と幕府軍伝習隊第二大隊との間で、四月二十一日夜半より翌日の明方まで戦われた。の直後に入城したわけで、忽ち超多忙となり、二日後には「看病人として此地の婦人九人を雇入れた」(弘田親厚著「会津征討日記」による)。

四、壬生城は、例幣使街道、日光街道、会津西街道が合流する今市の宿場に最も近い戦略拠点であるので、安塚の戦のあと今市方面に戦線が拡大しても城内の養生局はそのまま存在した。丹波山国農兵隊の藤野齋の『征東日誌』によれば、閏四月一日に壬生藩医・二代目斉藤玄昌(維新前に解剖・種痘の経験がある蘭方医)を召し出し、診療の加勢をさせている。また山国隊々員は閏四月二十日に安塚で負傷した隊員の見舞に壬生城に行っている。

五、前出の土佐藩医弘田玄又は嘉永年間、適塾並に大坂華岡合水堂に学んだ蘭方医であり、彼の記した「会津征討日記」を読むと、看病人の他に注目すべき記事が三つある。

①玄又は壬生城内でクロロホルムを用いて、指、肘の切断術を行った。ウイリアム・ウイリスにおくられること四ヶ月である。②壬生城内の患者総引あげが閏四月二十九日に行われ、城から駕籠と河船で江戸まで帰って来た。古河歴史博物館の元館長石川治氏のご教示によれば、城西方を流れる思川を都